

非行傾向をもつ同性モデルの出現が母子家庭の 男児の社会化に及ぼす効果

The Effect of the Encounter with the Male Juvenile Delinquent on the Male Child of Broken Home without the Father

内藤 哲雄
Tetsuo Naito

人間にとっての性(sexuality)は、生得的な生物学的要因によってのみ規定されているわけではなく、生後の文化的・社会的な環境との遭遇によって影響されるところが大きいことに異論はないであろう。人間の性は、文化の担い手でありかつ伝達者である家族や他者との相互作用、またマスメディア等を通じて、次第に社会化されていくものである。

ところで、現代社会では、機械や電子機器の高度な発達により肉体労働が減少したこと、女性が少人数しか出産しなくなったこと、ウーマンリブの影響などにより男女の平等化が促進されたことから、性役割が変容し平準化しつつあるといわれる。また、男性も女性も、もともと人間としての共通性をもっているものであり、互いに相手の特性のほとんどを共有している。しかしながら、内容は現代社会の影響を受け変質し混乱を呈しながらも、依然として男女間では欲求や興味、考え方や行動の多くの点で体系的に異なっている。したがって、男性性と女性性の両者の特性を備えた心理的アンドロジニー(psychological androgyny)の方が、現代社会の多様な環境に適応できる(Bem, 1975)としても、それらは相対的にのみいえることである。また、生物学的な性と異なった育てられ方をした場合には、性的同一性の混乱をもたらす精神的不適応に陥ることが知られている。現実にはたとえ心理的にであっても、生物学的な性を無視して正常な自我が形成されるなどということはいえないのである。このように論を展開するならば、同性のモデルに対する同一視(identification)あるいは社会的学習(social learning)の機

制による性的社会化は、性役割の形成にとどまらず、パーソナリティの形成など社会化全般に重要な役割を果たすことが理解されよう。

上述のような背景から、本研究では、母1人子1人の母子家庭の男児が、同性のモデルとして軽度の非行傾向をもつ相手との交友を開始してからの変化についての事例をとりあげ、社会化の問題を考察しようとするものである。

事 例

対象児

男児S、5歳11カ月。

家 族

母親A(48歳)は、高卒後金融業を営む親のついでで公務員となり、20歳のときLと結婚。1年後にLと別居し、親から家を建ててもらった。

30歳のとき、妻子を残し出張してきていた後に本児Sの父親となる男性Nと出会い、交際をはじめた。Aが33歳のときNとの交際を親に反対され断落した。AとNは2人とも(Aはレジ係として)キャバレーに勤務し、ホテル住いで3年近く過ごした。その後Nは別の店に転勤となり単身赴任し、麻薬を常用するようになった。1人で店を任されたAは、まもなく倒産したことと、Nの麻薬代のため多額の負債をかかえたため、親に連絡をとり返済した。親からNと別れるように諭されたが、転居後再び同居し別のキャバレーに勤務。Aはレジ係であるが、Nはやがて支配人と

なる。金回りの良くなったNは再び麻薬を常用し、別の女性たちとの交際をはじめた。

Aが40歳のときLと協議離婚。Nの子を流産す。借金に追われ麻薬を打ちながら暴力をふるうNから逃げ回る生活の中で、41歳のとき再び妊娠した。Aはとてども産む気になれず中絶するつもりであったが、Nは検診のとき送り迎えまでして出産を勧めた。しかし、Aの腹部が目立つ頃から2人の関係が悪化。Aが身を隠している間に、Nは別の女性を住居のマンションに引き入れた。その直後にNは麻薬常習で逮捕された。警察に面会に行ったところ、Nは「知らない、忘れた」とAが内縁の妻であることを否定した。すでに中絶は不可能で産む以外になかったが、Aは「産んでも子どもは育てない、いらぬ」と考えていた。しかし、Nと別れる決心もつき出産したところ、養育したい気持ちが強くなり、「自分の生活が安定するまでの間施設へ預けたい」と希望。出産費用は借金して退院。本児Sは生後24日目に乳児院に一時保護となり、まもなく入所措置がとられ1歳9カ月まで在院した。

このあいだ母親は毎月平均5〜6回面会に行っていた。本児Sが1歳5カ月のとき、父親Nから母親Aに別の県の運送会社でまじめに働いているとの電話連絡があった。翌月Nは、本児と会い公園に連れて行き遊んだ。5カ後AはNの勤務先を訪ね勤務ぶりを確認した。翌月にAとNは新しく借家をかり同居を開始した。2カ月後にNは離婚したが、Aとの入籍はしなかった。そのあとAとN2人の強い希望により、措置解除が決定され本児Sは引き取られた。しかし結局NはSを認知せず、更生しないままに再び水商売に従事し、同居の生活も長続きしなかった。このためAとSは2人だけの母子家庭となった。母親は現在スナックを営んでいるが、以下に述べるように本児には問題行動があるし、お客が少ないので休業している。本児が落ち着いたら開店するつもりでいる。知人からは昼の仕事をした方がよいといわれているそうである。

本児の生活史と同性モデルとの出会い

本児Sが親に引き取られた1歳9カ月から3歳7カ月までは、母親の働いている間託児所に預け

られていた。その後転居してからは現在に至るまで、アパートの大家が面倒をみてくれ、外に連れ出したり、七五三のお祝いまでしてくれた。本児はこれまで保育園や幼稚園には入園せず、自宅で過ごしている。

5歳3カ月頃までの本児は、交友相手もなくほとんどの時間を家の中で過ごし、お人形遊びや針・鉄を使うのが好きで女兒のように遊んでいた。母親が不思議に感じるほどであった。これを心配した大家が、本児の遊び友達として小学校1年生の男児3人と小学校5年生の男児1名Bを紹介したところ、一緒に集団で遊ぶようになった。ところがそれから6カ月後、本児の手が届く低いところに置いておいた財布からお金がなくなっていた。本児はまだ100円、10円、1円の硬貨や1,000円札と10,000円札の区別もできないのに、自分の財布の中に1,000円札を4つ折りに入れていた。また、本児を家族同様にかわいがり、自動販売機のお金まで扱わせていた大家は、引出しから本児がお金を抜き取るのを目撃した。母親はいずれの場合にも、「他人のものを盗んではいけない。言うことを聞かないと施設に入れる」と厳しく叱った。

ところがそれから2カ月後には、母親のカセットテープ・レコーダーを持ち出していた。その直後にアイスクリーム3個が入った袋を、1年生の友達の家の中に隠していた。本児にカセットを返すように要求すると、「はい」と答えていたが、その後で「なくなった」といいはじめた。アイスクリームの入った袋の店名から、テープレコーダーを持って行ったのは5年生の交友相手Bではないかと追求すると、1,000円か2,000円で買うといわれたとのことであった。また同じ頃B達とともに集団で踏切に子供用の車を入れ、電車を止めたりした。以前はいつも母親の後をついて歩いていたのに、今では朝早く飛び出したきり帰ってこなくなり、問題を起こすようになった。母親は急に悪くなったと驚いているとのこと。

本児の観察

母親の面談のため一緒に来所した本児は、直前に終了した別の母親がぐずりはじめた兄弟を叱っているのを目撃した。このため本児は「帰りたい

よう！怖いよう！」と泣き叫びながら、母親の服を掴んでいた。母親が「言うことを聞かないと置いて行く」というと、本児は「言うこと聞く、いい子になる」と泣き続けた。

臨床心理士（著者）が心理判定室で母親と面談するため、児童福祉司（女性）が遊戯室に連れて行き遊ばせていたところが、不安を感じさせないように両方の部屋のドアを開けていたためもあると思われるが、3回ほど母親のそばまで来て様子をうかがったり、話しかけた。その後は福祉司と2人で遊んでいた。

帰るときは母親とともに「ありがとうございました」といいながら嬉しそうに礼をし、「バイバイ」と声を出し手を振りながら出ていった。

所 見

(1)本児が盗みをしたときに、「言うことを聞かないと施設にいれる」と厳しく母親に叱られ、その後2カ月問題を起さなかったこと、(2)母親の面談のため一緒に来所したとき、よその兄弟が叱られているのを目撃し「帰りたいよう！怖いよう！」と泣きだしたことで、そのとき母親に「言うことを聞かないと置いていく」と叱られ、「言うことを聞く、いい子になる」と泣き続けたことから、1歳9カ月まで乳児院に入所していたことが外傷体験となっていることを窺わせる。

親に引き取られてから5歳3カ月頃まで、お人形遊びや針・鋏を使うのが好きで女兒のように遊んでいたのは、(1)施設に入所していた1歳9カ月までは、面会にきていた母親とだけ弱い愛着が形成されていたこと、(2)父親との出会いと家族との同居、その後の父親の別居を体験する中で母親への愛着が強固となったこと、(3)父親を含め同性のモデルが身近にいなかったことが原因と推定される。

はじめの交友相手で、かつ同性のBら4名との出会いは、「いつも母親の後について歩いていた」本児を、母親から分離させ、彼らをモデルとして男性的な遊びを学習する契機となっている。同時にBの影響を受け、母親や身近な人から金品を盗むなどの問題行動を生じている。

本児の盗みに関しては、母親から現金1回、物品1回、大家から現金1回で、家族や家族同様に

している相手からである。現在までの回数も少なく、習慣化しているとはいえない。Bの非行傾向も強いとはいえず、本児を本格的な非行に導くとは考えられない。

以上のような分析から、父親不在の本児の母子分離を促進し、男性的な遊びや性役割を獲得させ、社会性の向上に貢献する交友相手との交流を制限するよりも、母親を通じて道徳的価値基準を獲得させる方が得策と判断された。

母親への指導

まず、母親としてはつらいであろうが、母親から分離し同性の集団に加わり、男性的な遊びが見られるようになったことは、本児の成長にプラスであること、Bの非行傾向も弱く交友を制限しなくてよいことを説明した。

ついで盗みについては、家族や同様の相手に限定されていること、回数も少なく現在までのところ習慣化されておらず、交友相手Bの機嫌を取ろうとしてなされた可能性もある点を指摘した。今後も繰り返すであろうが、母親としては、本児の盗みにはいられたことが、そしてそのことを悪いと感じている感情を冷静に受けとめてやり、本児が落ち着いてから話して聞かせるように指導した。また、本児は乳幼児期に施設に入所したことがつらい体験となっていることから、叱るときたとえ効果があっても「施設に入れる」というべきでないことを伝えた。ついで、本児が男性的な遊びや行動をしたときは、積極的に支持したりほめてやるように助言した。

論 議

Lamb(1980)は、アタッチメント行動を身体接触と身体的接触に対する欲求に密接に結びつけた行動と定義し、生後7カ月から2歳までの母親と父親への発現について縦断的に観察した。その結果、生後1年6カ月までは両者に差がなかった。それ以降の2歳までをみると、ストレス状況では母親に、ストレスのない状況では父親に対してより多く表出していた。さらに分析すると、サンプル中の多数の男児が父親の方をアタッチメントの

対象としていた。これに対し女兒では、あるものは父親を、あるものは母親を選択し、またあるものは両親を同じように選択し、両者に違いがみられなかった。また、父親は女兒よりも男児に対してより多くの声をかけていた。ついで、親が子どもを抱くときの理由を調べると、母親の方が多いのは世話をしたりしつけるためであり、父親の方が多いのは遊びのためであった。さらに遊びの内容を検討すると、父親は身体的遊びや子どもを直接刺激するタイプや平行遊びが多いのに対し、母親の方は「いないいないばー」などの伝統的なものや読書であった。

さらに Lamb は、多くの研究者が、(1)性的同一性の発達の臨界期は生後2～3年までであるとし、(2)男子は生後数年間父親が不在であると、適切な性役割を身につけるのに困難を生じやすく、(3)父親は性にふさわしい行動をとることについて、とくに息子の場合には母親よりも強い関心をもっており、(4)女子は性的分化の過程が男子よりも遅い時期にはじまりかつ緩やかである、ことを指摘しているのを受け、「父親は、子どもの乳児期から、とくに男子にとって性固有の行動の発達を促進させる特別に重要な役割を演じている」と結論している。

ところで、父-子関係に母親が及ぼす影響について展望した Lynn(1978) の男児に関する記述によれば、結婚生活がうまくいっている場合には、母親は男の子に父親の考えを伝達し、父親の価値観や規範意識を支持し、子どもにとっての男性モデルとしての父親のイメージを強化する。これに対し夫に批判的な母親は、男の子に対して、あからさまに、あるいはそれとなく、女らしさを身につけるように勧めてしまいやすい。そして長期にわたって父親が不在の場合には、不在中に母親と男児との間に強い絆が結ばれるので、父親が帰ってきたとき子どもも父親も相互に適応するのに時間がかかり、なかなかよい関係ができないばかりか母親と男児の絆がますます強くなるのである。また、別居、離婚、死亡により家庭に父親がいない場合には、母親は子どもの父親についてのイメージ形成を左右できる立場にある。もし父親が家庭を去ったとき子どもが小さければ、父親についてのイメージは母親の操作だけで決ってしまう。不

在の父親について母親が軽蔑的ないいかたをしていると、男の子は父親に対して否定的なイメージをもつようになるだけでなく、自己概念をも否定的に形成し、不適応行動に陥ってしまう。そして Clausen(1962)はさらに、家庭に男性役割をとるモデルがないことよりも、母親が不在の父親、あるいは男性一般に対してとる態度の方がより重大な影響をあたえる要因であることを指摘している。

また Biller(1969)は、5歳の男児をもった夫のない母親を対象に、子どものレスリングとか泥遊びなどをどの程度受容するか拒否するか、すなわち子どもが男性的であるように励ます程度について調査した。その結果、母親が男らしさを促進する程度と、子どもが男性的なゲームを選好する度合や教師がその子どもを男性的と評定する程度が関係していた。この結果は、父親がいないことで起こり得る危険性を母親が認識し、男児の男性的行動を強化し積極的に価値づけることで、性的社会化を促進できることを示唆する。しかしながら、父親がいないということは、同時に母親にとっては夫の喪失を意味する。夫があたえてくれるべき愛情、性的満足、財政上の支え、監督に際しての助力、ともに考え責任を共有してくれる人の喪失を意味するのである。このようなストレス状況の中で、さらに多くの場合男性への不信感をともないながら、親としての役割を果たさねばならない。その役割には、通常は母親が担う社会の低位組織の1つの単位として家族が円滑に働き続けるようにするための表出的機能と、通常は父親が分担する家庭を社会に関係づけるための道具的機能(Parsons, 1964)の両方が含まれるのである。

以上の知見をもとに、本研究の事例を振り返ってみよう。まず、出生直後から1歳9カ月まで乳児院に収容されていたことがあげられる。母親は毎月5-6回面会に行っていたが、これでは愛着形成に不十分であろう。また近年の研究から愛着形成の対象となることが知られるようになった父親に対しては、1歳6カ月までは1度も会っておらず形成されるべくもない。麻薬常習で逮捕され、母親との内縁関係を否定し、刑務所に入ってから音信不通であった父親については、それまで本児に語られることもなかったであろう。それゆえ、漠然とした父親イメージの形成もできなかったで

あろう。1歳9カ月過ぎに両親に引き取られたが、すでに形成されているのは母親との絆だけであり、父親と本児のいずれもが適応するのに困難を感じたと思われる。父親が再び不在となって家庭崩壊してからは、母親への強い愛着が生じている。犯罪傾向をもち再び家族を遺棄した父親について、本児が肯定的イメージをもつように母親が努力するなど考えるべくもない状況であった。このような物理的にも心理的にも長期間にわたる父親の不在が、本児の父親への同一視を不可能にしたといえよう。さらに保育園にも幼稚園にも通園せず、交友相手もなくほとんどの時間を家の中で過ごしたことが、お人形遊びや針・鋏を使うのが好きで、女兒のように遊ぶ傾向をもたらしたとはいえよう。

こうした経緯の中で軽度の非行傾向をもつBと出会い、はじめて同一視の対象となる同性モデルを得たといえよう。そして父親不在がBへの愛着的傾向を強めたと考えられる。このため以前はいつも母親の後について歩いたのに、今では朝早く飛び出したきり帰ってこなくなり、Bをモデルとして男性的行動がみられるようになったのであろう。それとともに母親や家族の人物からの盗みをするようになったといえよう。非行的行動は問題であり、母親を通じて道徳的価値基準を獲得させる必要があるが、本児の男性役割獲得やより一般的な社会化のためには、同一視の相手であるBとの関係は重要であろう。そして母親が本児の男性的行動を強化し選好させることが望まれる。

要 約

本研究は、母1人子1人の母子家庭の男児が、同性のモデルとして軽度の非行傾向をもつ相手との交友を開始してからの変化についての事例をとりあげ、性役割の獲得と社会化の問題について検討したものである。

事例の男児は、出生時からの長期にわたる父親の不在により、母親への強い愛着をもつようになり、父親への愛着形成や同一視ができなかった。お人形遊びや針・鋏を使うのが好きで、幼稚園や保育園にも通園せず、家の中で女兒のように遊んでいた。母親は本児が男性的行動をとるように働

きかけるのに成功していなかった。このような状況の中で同性モデルとなる軽度の非行傾向をもつ年長者との交友が開始され、この相手への同一視により男性的役割行動と問題行動がみられるようになった。これらの経緯について、父親が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究や性的社会化に関する研究による知見を援用し、分析的に考察、論議された。

(1990. 6. 28 受理)

引用文献

- Bem, S.L. 1975 Sex role adaptability: one consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.
- Biller, H.B. 1969 Father absence, maternal encouragement, and sex role development in kindergarten-age boys. *Child Development*, 40, 539-546.
- Clausen, J.A. 1962 Personality attributes and the perception of parental authority. Paper presented at the meeting of the American Sociological Association, St. Louis, August.
- ラム 黒岩 誠 (訳) 1986 2歳までのアタッチメント(愛着)の発達 ベダーセン(編) 依田 明(監訳) 父子関係の心理学 新曜社 (Pedersen, F.A. 1980 *The father-infant relationship: observational studies in the family setting.*) 第2章, 27-52.
- リン 今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森 護(共訳) 1981 父親: その役割と子どもの発達 北大路書房 (Lynn, D.B. 1978 *The father: his role in child development.*)
- パーソンズ 武田良三(監訳) 1973 社会構造とパーソナリティ 新泉社 (Parsons, T. 1964 *Social structure and personality.*)